

「そらをとびたかつたペンギン」

川崎市立大谷戸小学校一年

よしだ ひなた  
吉田陽太

ぼくはこの本をよんでこれからしたいとおもったことがあります。できないことがあつてこまっぺっている人がいたらぼくができることをかんがえておてつぱいをするだけじゃなくてやろうとしていくことをおうえんしようとおもいました。ぼくにはいもうとがいます。いもうとのできないことがあるとぼくがやつてあげるねといつてやつてあげていました。でもこの本をよんでおもったことは、ほんとうはいもうとはじぶんでやりたかつたかもしれないし、じぶんでやつたほうでできたときほうれしいんじゃないかとおもいました。できる人ができない人をたすけておしえてあげたりおてつぱいをするだけじゃなくて、どうしてほしいのかわかなくてじぶんでもかんがえてみようとおもいました。それからぼくはさいしょ、モモはみんなとおなじようにできなくてかわいそうだとおもいました。でもいまはそうおもいません。どうしてかというところ、モモにもできることがあつてそれをしていくからです。ぼくにはモモがしあわせそうにみえてほつとしました。おあなたへ」というところをおかあさんによんでもらつて、みんなとおなじようにしたくてもできない人もいることがわかりました。それはだめなことじゃなくて、みんなかおもからだもちがつたいにできることもすきなこともちがつたいにできることもすきなこましました。ぼくはいらんだね、とぞくとはなしのたのしいです。だからみんなちがうことはいことがたくさんあります。でもみんなとちがうことかなしそうです。でもみんなとちがうことかなしそうです。でもみんなとちがうことかなしそうです。でもみんなとちがうことかなしそうです。